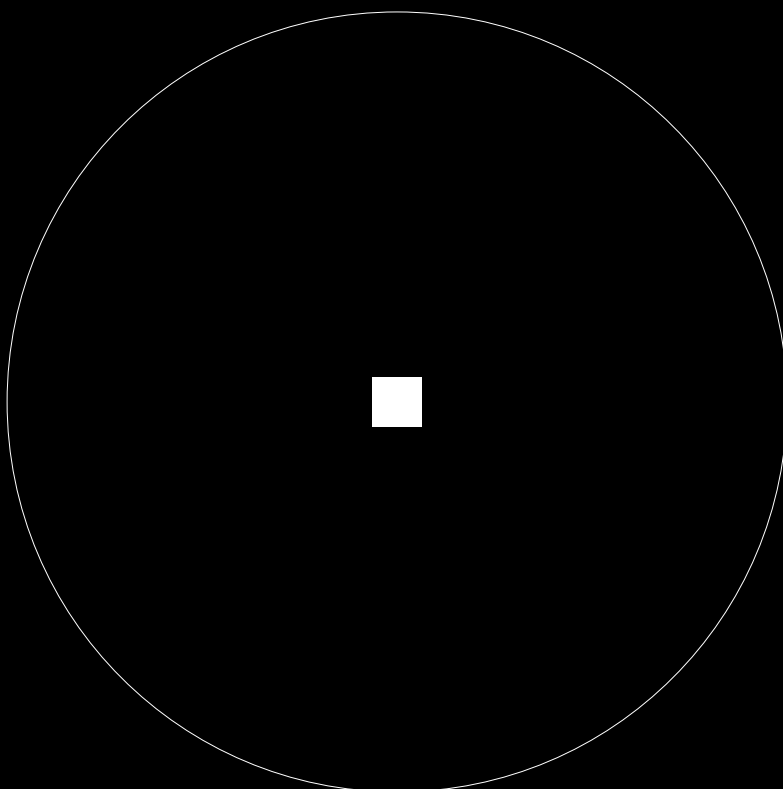


IN AND OUT OF THE SCENE

Seven art centres working from the outside

アートが息づく場の内と外：

「アートセンター」の意味と役割を考えるラウンドテーブル・フォーラム



AIT では、2015 年 2 月 25 日に、7 つの美術機関を招き、代官山の AIT ルームで、今日のアートセンターの意味と役割を話し合うラウンドテーブル・フォーラムを実施した。本ラウンドテーブルは、AIT のレジデンス・プログラムにて、カムデン・アーツ・センターのキュレーター、ジーナ・ブエンフェルドを東京に招へいしたことを契機に行われた。現在、多くの美術機関がハイブリッド化、そしてネットワーク化に重点を置くなか、中心を意味する「アートセンター」という用語そのものが、さまざまな意味で時代遅れに響くようにも思われる。アートの「脱中心化」に関する議論も活発だ。しかし、一方で、アートは常に、人が集う場所や特定のテーマ、コミュニティの中心において実践されてきたと考えられないだろうか。歴史的に見ると、1960 年代の東京では、前衛芸術運動の重要なハブとしてアートセンターが存在し、特に草月アートセンターはその役割を担っていた。その後、80 年代にはこのようなアートセンターは消散し、地理的にも分散してしまった。今では、世界の多くの芸術都市と同様に、東京のアートシーンは非常に断片化してしまっていると考えられる。

本ラウンドテーブルにおいて、私は相互に関連する 3 つの問いを提起した。1) 私たちは今日、アートやアーティストとどのような関わりを持って活動をしているのか？ 2) 広義のパブリックやコミュニティとどのように協働しているのか？ 3) アートセンターを「考える機械」(カムデン・アーツ・センターディレクター、ジェニー・ロマックスの言葉を引用) と考えることは可能か？ 当日は、まず、ブエンフェルドが、カムデン・アーツ・センターの歴史的経緯と、現在における活動の概要を紹介し、その後、AIT を含む東京を拠点とする 7 つの自律した美術機関が議論に加わり、これまでの経験や今後の考えを共有した。そのなかで、アーティスト・イン・レジデンスや批評的なリサーチ・ワークショップ、アーカイブの構築、アートスクール、アーティストのためのスペースなど、幅広いモデルが紹介された。

1960 年代のアートセンター全盛期を振り返ると、アートセンターの活動は、民主化や都市化、市民参加という国内政治に組み込まれてもいた。この時期、イギリスでは、ジョン・バージャーの「Ways of Seeing」(1972 年、BBC) という急進的なテレビ番組が放映されていた。この番組は、さまざまな意味において、アートが対話のプロセスや相互主観性、関係性として捉えられていく転換を予知していた。アートセンターは、グローバル化する資本や情報という現代の文脈のなかでどのように捉えることができるだろうか？ おそらく、「センター」とは、物理的な空間としてのみではなく、「中心化する」活動、つまり、静止点、時間的な集中心点であるということをも指し示しているのではないだろうか。

ロジャー・マクドナルド (AIT)

The opportunity to host curator Gina Buenfeld from Camden Arts centre in London became a catalyst to organize a roundtable discussion about the meaning and role of art centres' today. The very term 'art centres' in many ways seems old fashioned now, as arts organizations emphasize a more hybrid and networked model of working. Debates about the de-centralization of art have been prominent. However, art has also always operated through places of gathering, focused themes and centres for communities. Historically Tokyo in the 1960s had art centres that served as important hubs for avant-garde gathering, most prominently The Sougetsu Art Centre. These centres dissipated and became geographically dispersed through the 1980s, and today, like many other art cities in the world, Tokyo's art scene is highly fragmented.

I proposed to ask three interlinked questions through the roundtable: a) how do we work with art and artists today? b) how do we work with broader publics and communities? c) can we think about art centres as 'thinking machines' (in the words of Camden Art Centre's Director Jenni Lomax). I invited Gina to give a brief overview of the historical and current activities of Camden Arts Centre. Seven Tokyo based independent arts organisations, including AIT, were invited to participate and share their experiences and ideas for the future. A broad range of models was represented, from artist in residency programs, critical research workshops, archive-building, art schools and artist based spaces.

The heyday of art centres in the 1960s was also embedded in a national politics of democratization, urbanization and participation. This was the era of John Berger's radical 'Ways of Seeing' (1972, BBC television), which in many ways heralded a shift towards art as a process of dialogue, inter-subjectivity and relations. How can we think about art centres in the contemporary context of global capital and information? We can perhaps suggest that a centre today not only points to a physical point in space, but also to an activity of 'centering', to a sense of stilling and concentration in time.

Roger McDonald, AIT.



IN AND OUT OF THE SCENE:

アートが息づく場の内と外：

「アートセンター」の意味と役割を考える

ラウンドテーブル・フォーラム

2015 年 2 月 25 日 (水) 6pm - 9pm

場所：NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/ エイト]

(東京都渋谷区猿楽町 30-8 ツインビル代官山 B403)

主催：NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/ エイト]

助成：平成 26 年度 文化庁 文化芸術の海外発信拠点形成事業

参加者

朝重 龍太 (アーカスプロジェクト)

塩見 有子 (アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT])

堀内 奈穂子 (アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT])

ロジャー・マクドナルド (アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT])

嘉藤 笑子 (アート・アウトノミー・ネットワーク (AAN))

小川 希 (アートセンター・オンゴーイング)

ジーナ・ブエンフェルド (カムデン・アーツ・センター)

太田 エマ (ディスロケイト)

庄子 渉 (パラダイスエア)

森 純平 (パラダイスエア)

IN AND OUT OF THE SCENE:

Seven art centres working through art from the edges

A roundtable forum in Tokyo about the role and meaning of art centres today, with seven different models of practice.

Wednesday 25th February, 2015 6pm - 9pm

Venue: Arts Initiative Tokyo [AIT] (403 Twin Building Daikanyama,

30-8 Sarugakuchō, Shibuya-ku, Tokyo 150-0033)

Organized by: Arts Initiative Tokyo [AIT]

Supported by: Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2014

PARTICIPANTS

Ryota Tomoshige, ARCUS Project

Yuko Shiomi, Arts Initiative Tokyo [AIT]

Naoko Horiuchi, Arts Initiative Tokyo [AIT]

Roger McDonald, Arts Initiative Tokyo [AIT]

Emiko Kato, Art Autonomy Network / AAN

Nozomu Ogawa, Art Center Ongoing

Gina Buenfeld, Camden Arts Centre

Emma Ota, dislocate

Wataru Shoji, PARADISE AIR

Junpei Mori, PARADISE AIR

INTRODUCTORY PRESENTATIONS BY THE SEVEN ART SPACES

7つのアートスペースによる活動紹介

朝重：アーカスプロジェクトは、茨城県守谷市を拠点としたレジデンスプログラムを運営しています。日本でもっとも長期的に続いているプログラムの一つで、1994 年に始まりました。公募によって選ばれた 3 名のアーティストが、現地で 100 日間、滞在制作を行います。プログラムの目的は若手アーティストを支援することと、地域住民に向けて芸術を普及することで、アーティストと地域住民が相互に関わることを求めています。

小川：アートセンター・オンゴーイングは、ギャラリースペースやカフェ&バースペースを備えた芸術施設で、アーティスト有志がリノベーションを手伝ってくれた古い民家を使っています。展覧会の入場料はお茶付きで 400 円と決めているので、来場者は展覧会を観た後、気軽にカフェに行き、展覧会について話し合うことができます。私は、このカフェと、週末に開催するイベントからのみ収入を得ています。また、2 年前からレジデンスプログラムも始めました。公募により 1 年間に 5 名のアーティストを招聘し、近くの宿泊施設に滞在してもらっています。新しい展覧会を 2 週間ごと、一年間に 25 の展覧会をノンストップで企画していますが、もし私がこの流れを止めてしまったらプロジェクトは崩壊してしまうことでしょう。つまり、このスペースは、私のパーソナルなアートセンターであると言えます。

塩見：AIT は、2001 年に設立され、MAD というアートの学校をスタートしました。当時、主流だった「アーティスト・コレクティブ」ではなくて、キュレーターやオーガナイザーの集団が立ち上げたことは、ユニークだったと思います。これは、私たちが、日本の美術教育に疑問をもち、キュレーションとオーディエンスのコースで学校を開始したこととも関係しています。また、活動を始めてすぐに、東京には海外のアーティスト受け入れる仕組みが不足しているということに気づきました。そこで、アーティストに時間と空間を提供する、リサーチ型のレジデンスを作りました。私たちは、こうした異なるプログラムを通じて、人々が出会い、現代美術について考え、語る場を作り出すことを目指しています。



朝重 龍太／アーカスプロジェクト
Ryota Tomoshige, *ARCUS Project*

Ryota Tomoshige: ARCUS Project runs a residency program based in Moriya City, Ibaraki Prefecture. It is one of Japan's longest running programs, having started in 1994. Three artists are selected from an open call application and stay for 100 days. The aim of the project is to support young, emerging artists and promote the arts to the local people. Artists and the local people are required to communicate each other.

Nozomu Ogawa: Art Center Ongoing is an art institution with a gallery space, cafe and bar. It is located in an old house that was renovated with the help of artists. The exhibition entry is set at 400 yen (with tea) and so people come down to the cafe to discuss the show. I only earn money from the cafe and events that are held there each weekend. We also started a residence program two years ago and we invite five artists (via open call) per year and they stay in a house nearby. I make a new exhibition every two weeks – 25 a year – I can't stop. If I stop then the project will collapse – my space is a personal art centre.

Yuko Shiomi: AIT was founded in 2001 and it started out as an art school. It was unique in that we were not an artist collective, we were curators and organisers. We started with an education program because we thought that there was a chance to offer a new system within Japanese art education. After two years we found that residency programs were lacking and we wanted to create some kind of residency program as a base for an artist – providing space and time for a research-based program. We try to create a place for people to meet and discuss contemporary art through various programs.

Emma Ota: dislocate has undergone many transitions but it has moved and shifted with site specify at its core, forming a responsive project building critical dialogues with context and locality. Although centred around a residency program, we have no studio space as such - the urban space is our studio, which we take as a platform for collaboration and communication - in a very participatory endeavor, which makes little distinction between artist, participant and organiser. We approach art as a question - and we try to direct that question towards public space itself. If you are going to start a dialogue about place and public, we need to start with who is next to us and this why we have focused the residency on the Asian region. Our DIY approach also keeps things close to hand and through small scale collisions and convergences we hope to open up other ways of being in a familiar environment.

Wataru Shoji: PARADISE AIR is a residence program in Matsudo that was established in 2013. It is a former love hotel in an area where many travellers passed through on their way to Edo from Mito. At

太田：ディスロケイトは、サイトスペシフィックな活動を軸に、文脈と地域性に批評的議論を積み重ねながら変化を遂げられました。特にスタジオスペースのようなものは持ち合わせていませんが、都市空間を協働とコミュニケーションのプラットフォームと捉え、アーティストや参加者、主催者といった垣根のない、誰もが積極的に参加できるレジデンス・プログラム作りに力を注ぎました。私たちはアートを「問い」として捉え、その問いを公共空間に向けていくことを目指しています。場所や公共性について対話を始めるときには、まず、隣人を知る必要があります。そのため、私たちはアジアに焦点を当てたレジデンス・プログラムに力を注ぎました。すべてを自分たちで手がける DIY 的なアプローチは小回りもきき、小さな衝突やその収束を通じて、慣れ親しんだ環境の中でも別のあり方を切り開いていきたいと思っています。

庄子：パラダイスエアは、2013 年松戸市に設立されたレジデンスプログラムです。以前ラブホテルだった施設は、むかし水戸から江戸に向かう多くの旅行者が通過した地域にあり、当時、多くの画家たちが宿泊代を作品で支払っていたことから「一宿一芸」をコンセプトとしています。アーティストは、市に作品を提供すれば無料で滞在することができるのです。ここにはロングステイ・プログラムとショートステイ・プログラムがあり、1 年間に 2 名のアーティストをロングステイ・プログラムに招聘し、彼らを経済的、技術的に支援します。このプログラムは、アーティストの作品を通して、街に多様性をもたらしています。

嘉藤：アート・アウトノミー・ネットワークは 2005 年に横浜でスタートし、現在は日本橋を拠点にしています。設立メンバーはアーティスト、キュレーター、研究者です。私たちは新しいアート・アーカイヴの方法を構築することを始めましたが、シンポジウムやアーティストトーク、その他のイベントも企画しています。横浜で活動を始めたときは、地方行政から助成や人的支援を受けていましたので、公的機関を活用することは可能でした。東京に移転してからは、空きビルに入居して、複数のクリエイターとシェアをしています。私たちはアーカイヴ・ミーティングや、アーティストがポートフォリオを持ち寄りプレゼンテーションするポートフォリオ・ミーティングなど、多数の「ミーティング」を開催しています。また最近、NICA: Nihonbashi Institute of Contemporary Arts というアートスペースを立ち上げました。本施設はインディペンデントで運営していますが、最初の展覧会は、文化庁の助成金を得たものでした。

ブエンフェルド：カムデン・アーツ・センターは「センター」と呼ばれていますが、それは、アートを作る場、人々が集まる場所であるという、展覧会以外の機能を持っていることを示しています。もともとは 19 世紀に建てられたビクトリア朝の図書館で、地域コミュニティに仕えるための市の建物でした。この要素はまさに現在のプログラムにも引き継がれています。1965 年にこの建物はカムデン・アーツ・センターになりました。この時期はアートの急成長期で、多くのアートセンターが設立されたのです。そしてカムデンはエリートのためだけではなく、一般の人々のためにアートを提供するアートセンターとして設立されました。この原則の一部として入場料は無料としているのですが、これは、展覧会が全ての人にとって開かれるようにするためです。またそれが可能なのは、このセンターが主に政府の助成を受けているからです。カムデンが、ロンドン中心部の外、市の北部に位置しているという事実は、他の機関ではおそらく負うことのできない、プログラム上のリスクを負うことができることを意味しています。カムデンを「中心」の外にある「センター」として考えてみることは興味深いことではないでしょうか。ここには、毎年 9 ヶ月間に渡る長期の現代陶芸のフェローシップがありますし、常に活気のある状態にしたいと考えています。作品をスペースに設置し、来場者にその作品について教える、というよりは、人々が入って来て、彼ら自身の方法で作品を経験できるよう、オープンにしておきたいと考えています。

嘉藤 笑子／アート・アウトノミー・ネットワーク (AAN)
Emiko Kato, *Art Autonomy Network (AAN)*



that time many painters paid for their overnight stay with artwork and so our concept is one night, one art. Artists can stay for free if they give some artwork to the city. We have a long stay program and a short stay program. We invite two artists each year for the long stay program and we support them financially and technically. This program brings diversity to the city through the artist's work.

Emiko Kato: Art Autonomy Network started in Yokohama (2005) and is now based in Nihonbashi. The original members were artists, curators and researchers. We started to create a new way of archiving but we also do symposiums, artist talks and other events. When we began in Yokohama it was funded by the local government – Yokohama wants to be a creative city and so it was very easy to use public spaces. Since moving to Tokyo we have been using a warehouse building that we share with other creators. We often organise “Meetings” – art archives meetings and portfolio meetings where artists bring a portfolio and make a presentation. We have recently started an art space – NICA: Nihonbashi Institute of Contemporary Arts – a project funded by Agency for Cultural Affairs.

Gina Buenfeld: Camden Arts Centre is called a centre that suggests it has a function other than exhibitions – a place for making art and where people come together. The building was originally a Victorian Library (built in the 19th century) – a civic building to serve the local community and that's really continued to the current programming. In 1965 the building became Camden Arts Centre – a burgeoning period of the arts when many centres were founded. As a centre it was set up to present art as not for only for the elite, but also for the people. Part of that principle is to have free admission – making exhibitions open for everyone – and we can do that because we are largely funded by the government. In Camden's case, we are outside of London – north of the city – which means we can take programming risks that other institutions wouldn't be able to make. It's interesting to think about Camden as a centre that is outside the centre. We have a long-term ceramics fellowship which runs for nine months each year – we like to keep spaces alive. Rather than objects placed in a space and visitors are taught about them we leave it open for people to come in and experience it in their own way.

EDITED HIGHLIGHTS FROM THE ROUNDTABLE

ラウンドテーブルより抜粋

空間から「時間」へ

マクドナルド: 90年代後半を思い起こしてみると、私がアートセンターに関連した様々なトークやシンポジウムに参加していたとき、その議論の重点は、空間ということに置かれていたように思います。今日、私たち皆がそれぞれ、さまざまな「時間」に関するテーマを提供しようとしていることはとても興味深かったです。この「時間」の問題は、現代美術のなかで、より重要な対話の要素になっています。

太田: 私たちはいま、場所と時間を占有することがどのような意味を持つかという点において、緊迫感を持って取り組んでいます。私たちのプロジェクトは、時間の中の、ある特定の瞬間に焦点を当てていますが、同時にさまざまな空間や時間軸に触れながら、いま、どのように向き合っていくべきかを考察しています。

ブエンフェルド: 私たちは今、パフォーマンスの要素が融合された展覧会に取り組んでいます。私の同僚がスウェーデンに研修に行ったとき、Lillithと呼ばれる、パフォーマンスに焦点を当てたビジュアルアート・スペースを訪れました。彼らは、展覧会というよりも、濃密な時間を持つパフォーマンスの制作を続け、観客について考察しています。継続する何かを持つこと、また、何かを強烈な経験に濃縮することが、より重要になっているのではないかと考えています。

マクドナルド: レジデンス・プログラムでは、滞在しているアーティストにとって、おそらく時間(もしくは経験)が最も重要なものだと思います。このことにどのようにアプローチしているのでしょうか？

朝重: アーカスでは、作品を完成させなくてよい、むしろ「未完成であることを目指す」ようにアーティストに伝えています。100日間というのは作品を完成させるには短い期間です。プログラム終了後も、滞在中の制作をいかに終わらせず、今後に引き継ぐのが重要です。だからこそ、私たちは展覧会ではなく、オープンスタジオを開催しているのです。

堀内: 2013年に私がアーカスのゲストキュレータとして関った際に、とても興味深いと感じたことは、アーティストがリサーチを通して自分たちの作品そのものだけでなく、守谷の地域の人々と共に、それぞれの経験や観察に関する議論をするということです。こうした地域住民との時間や関係性は、東京のレジデンス・プログラムではなかなか見られないものだと思います。

太田 エマ / ディスロケイト
Emma Ota, *dislocate*



FROM SPACE TO 'TIME'

McDonald: When I think about the late 90s, when I used to attend various talks and symposiums about art centres the emphasis used to be on space. Today I was very much struck by the way that we are all trying to provide different aspects of time – something that is becoming a much more important dialogue in contemporary art.

Ota: We deal with a sense of urgency in terms of what it means to occupy space and time, right now. Although our project is focused on a moment of time, it still references and dissects many other layers of time and addresses how we negotiate this, in the now.

Buenfeld: We've been working on some exhibitions with an integrated performance-based element. A colleague made a research trip to Sweden, and visited a space called Lillith, a visual arts space that's performance focused. They will work up to an intense period of performance, rather than an exhibition, and thinking about audiences and it is more important to have something on consistently or condense something into an intense experience.

McDonald: For residency programs perhaps time (or experience) is most intense for the visiting artist. How do you approach this?

Tomoshige: I tell the artist not to have to finish any work, "try to be unfinished". 100 days is such a short time to finish works. It is more important to keep on dealing with the unfinished work after the artist leaves the residency. That's why we do open studio not an exhibition.

Horiuchi: When I was involved in the ARCUS as a guest curator in 2013, what was interesting was that because the artist's had a work in progress meant that they had to engage in other discussions about their experiences and observations with the local people in Moriya, rather than only focusing on their expression. It could be a different way of working compared to residency programs in Tokyo.

庄子 渉 / パラダイスエア
Wataru Shoji, *PARADISE AIR*



アートセンターの独立性について

マクドナルド:例えば以前なら地方再生、また現在は東京オリンピックなど、アートを社会的手段とする考えを、どのように捉えていますか?あるアーティストたちはこのような考えに肯定的ですし、また別のアーティストたちは関わることはできないと考えています。例えばディスロケイトの試みを振り返ると、空間との関わりはあくまでもメタレベルです。そして物事を言説から、もしくは批評的レベルから考えていると思います。また、地域はどのように公共空間の一部なのかということも。みなさんはいかがでしょう。

嘉藤:アート・アウトノミー・ネットワークは、『アートにとって自律は可能か?』という議題を持っています。それなしには、私たちのアート活動は難しいといえるでしょう。財政的には、できれば助成金に頼ることを辞めたいと考えています。今年に限って言えば、助成金の申請はしませんでした。そのことは、さらなる運営面の危機的状況を招いているのですが、一種の冒険のようなものです。

マクドナルド: パラダイスエアは行政からのプレッシャーはありますか？

庄子: 最近、パチンコ店が私たちの活動を経済的に支援し始めてくれます。日本ではパチンコ店に対して否定的な印象がありますが、行政だけでなく、地域企業からの文化支援に対して私たちもその期待に応えたいと思っています。

ブエンフェルド: カムデン・アーツ・センターが NPO であるということは、定められた予算が定められた期間のためにあるということです。以前は、その予算が全体の運営資金の 60%を占めていましたが、現在は 40%になりました。私たちにはある一定の安定があるのも事実ですが、この安定は、アーツカウンシルが優先事項とすることからのプレッシャーと対になっています。ここでいう優先事項とは、アートにおける卓越性、アートの普及、子どもと若年層への普及ですが、この全ては基本的に私たちがもともと取り組みたいと思っていることでもあります。私たちはまた、カフェやブックスペースを運営することに加え、アーティストが制作し、寄付してくれた作品を販売しています。これらの資金の流れのなかには潜在的な矛盾がありますが、助成を受け続けられるよう、かつ、独立性を失わないよう、皆が模索しています。

嘉藤: 独立性は、とても重要で、また考慮すべき問題です。もちろんアーティストはインディペンデントであり、自由でありたいと考えています。日本では、地域コミュニティと協働するという大きな流れがありますが、そのため、ほとんど地域住民に対する依存があるのです。私たちはコミュニティとの関係を依存ではなく、同位置の関係性を築いていきたいと思います。私たちがコミュニティの一員であることは認めますが、独立した一つの組織として認識してもらう必要があります。日本では、アートの世界はとても小さく、東京にこれだけの人がいるにもかかわらず、現代アートシーンの観客層は限られています。私は、それとは異なる観客と、別の関わり方を持ちたいと考えています。



ジーナ・ブエンフェルド / カムデン・アーツ・センター
Gina Buenfeld, *Camden Arts Centre*

AUTONOMY OF ART CENTRES

McDonald: Starting with rural regeneration and now with the Olympic Games isn't the idea of art as a social instrument also a big issue? Some artists are positive about this, some can't do it. Reflecting on what Emma does, you are clearly working in relation to space, but on a meta level. You're thinking about things from a discourse or critical level, and how local is a part of public space.

Kato: Thinking about AAN-is it possible for art to be autonomous? That is a fundamental question for creating activities for us. Funding always comes with an agenda to be an independent. We have not applied to get the grant in this year, it became certainly difficult to manage the organisation, even though it is challenging to get a substantial way.

McDonald: Is there pressure from Matsudo City?

Shoji: Recently the pachinko parlour has started to support us financially. In Japan there is a negative impression of pachinko and so – we are trying to live up to their expectations of not only the city, but also the pachinko parlour.

Buenfeld: CAC is an NPO (National Portfolio Organisation) which means funding is set for a period of time. It used to be 60% of running costs but now it's 40%. Whilst we do have some security and it comes with some sense of direction from the Arts Council based on their priorities: excellence in the arts, access to the arts, access for children and young people – which are all things we would address anyway. We also sell artist's works made (and donated to) us, as well as having a cafe and book space. With all funding streams there are potential conflicts. Everyone is trying to work out a way to remain funded without losing that independence.

Kato: Being independent is an important consideration. Of course artists are independent and want to be free. In Japan there is a big movement around working with a local

マクドナルド：私たちが開講している教育プログラム MAD (= Making Art Different アートを変えよう、違った角度で見てみよう)を通して、AIT がこれまで実践してきたことを振り返ってみたいと思います。私たちのコミュニティは自発的で、受講生は MAD に来ることを自分たちで選んでいます。彼らは福岡や吉祥寺といったように、様々な場所から通い、東京で活動する私たちのサポーターとパトロンのコミュニティを形成しているのです。これは、資本主義と消費のモデルから来ているのでしょうか。ここは場所をベースにしたコミュニティではなく、共通の消費と関心をベースにしたコミュニティなのです。

嘉藤：キュレーターとして発言すると、私にとって「コミュニティ」の輪郭は必要条件の一つです。本質的にはアーティストは自由であり、彼らが望むことは何でもできます。しかしキュレーターは、オーガナイザーとして、アーティストや観客、もしくは組織間の橋渡役として、多くの関係性を築いていながらプロジェクトを推進していかなければなりません。

これからのアートセンターのかたち

マクドナルド：最後のテーマに移りたいと思いますが、このテーマはアートがある種の「考える機械」だという、ジェニー・ロマックス（カムデン・アーツ・センター館長）の言葉から引用しています。多くのアーティストはアートを言説的なエンジン、もしくはプラットフォームとして考えていますが、ここにいる人たちが、それぞれのスペースをそのような形で考えているのか聞いてみたいと思います。

太田：議論の場の創出は、私たちの活動の土台となるものです。学びに従事することとアートセンターの公共プログラムについて、ロマックスは「考える機械」と言及しています。また、言論の形態や概念にとらわれず、公共空間やコミュニティにおける自らの経験や実践を通じて、異なるレイヤーでのコミュニケーションや思考の構築に関心を持っています。

小川：私のスペースでは、地域コミュニティとコミュニケーションをとることができないアーティストも何人もいますが、彼らは孤立しているわけではありません。また、彼らは自分のことだけを考えているわけではなく、政治や社会について考えています。以前、日本政府がより右翼化し、危険な状況になってきているのではないかという危機感から、アートと政治に関するシンポジウムを開催しました。アーティストが政治や政治的問題にどのように取り組むことができるのか考えたかったのです。そして、私たちの場所に来るアーティストと話し、そのようなトークセッションを開催したいと思いました。そして結果、多くのアーティストが来てくれました。



小川 希／アートセンター・オンゴーイング
Nozomu Ogawa, Art Center Ongoing

community organisation – there is almost reliability on the local people. We want to be one of the community members. In Japan it is still a very small art world – there are so many people in Tokyo but the contemporary art scene has such a small audience. I want to make a different audience and make different contact.

McDonald: Reflecting on what AIT has done through its school. Our community is self-made, people decide to come to our school. They might be living in Fukuoka or Kichijoji, many different places, but they form our community of supporters and patrons. Maybe it's coming from a model of capitalism and consumption. It's a community not based around a place, but a shared consumption or interest.

Kato: As a curator, on my outline 'community' is one of the requirements. Essentially it's free, the artist can do things themselves. The curator however, as organiser, is much more involved as a bridge between artist and audience or organisation.

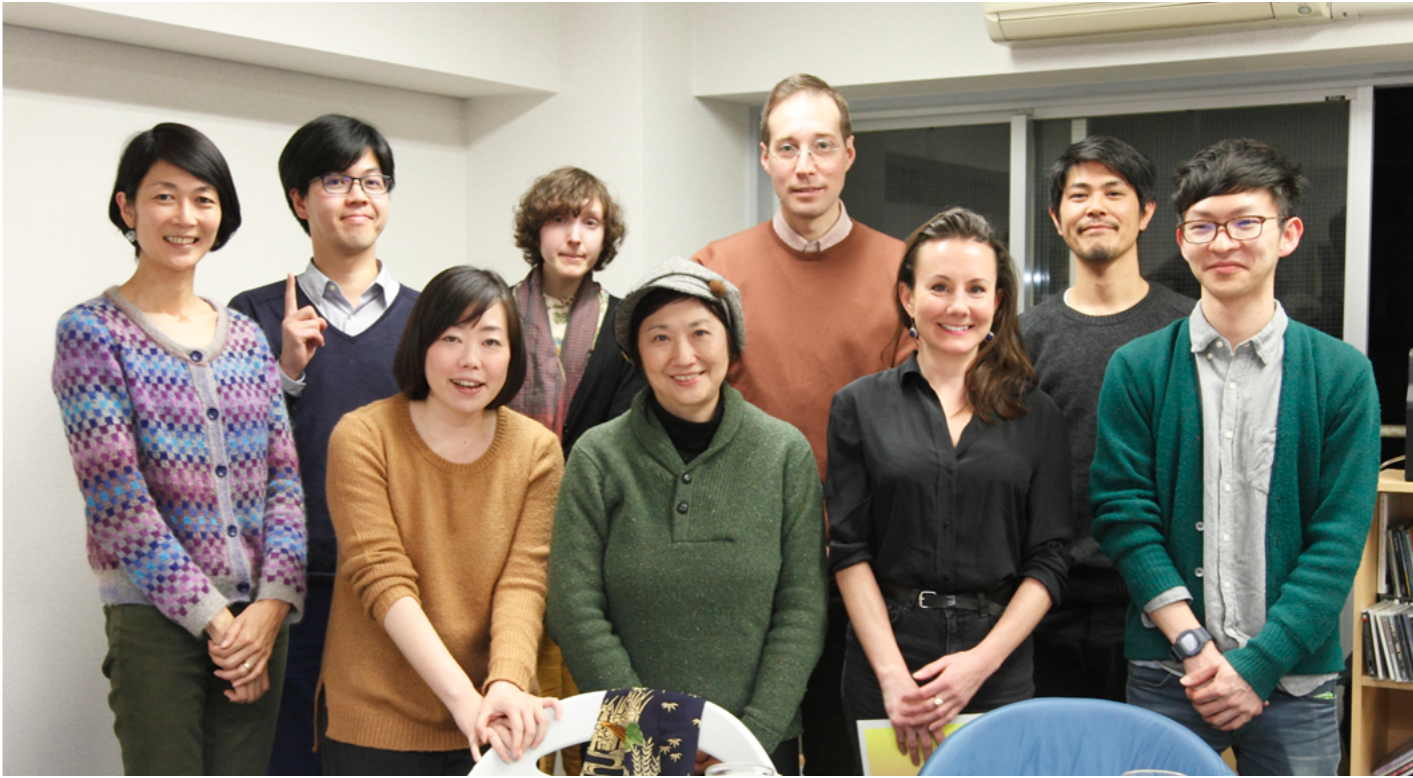
SHARING INTENSITIES

McDonald: Moving to the final theme, which came from a quote from Jenni Lomax about art being a kind of 'thinking machine'. Many artists are thinking about art as a discursive engine or platform but I was wondering if anyone has thought about their spaces in that way.

Ota: Creating a discursive space is fundamental to what we do. Lomax references this “thinking machine” in terms of engaged learning and public programs of the art centre. We are also concerned with building different layers of communication and thinking, not merely restricted to forms of speech or conceptual fields but also in practical terms of going out and testing what your experience of public space and community is.

Ogawa: In my space there are many artists who can't communicate with the community, but they are not alone. They are not only thinking about themselves. They think about politics and society. I had one symposium on art and politics because in Japan the situation is so dangerous because the governing party has become more right wing. I want to think about how artist's can work with politics or political issues. I want to talk with the artists that come to my space and to make that kind of talk session. So many artists came to that talk session.

Shoji: At PARADISE AIR it functions for local people and artists to exercise or improvise. Time is limited so artists have to improvise based on the situation. It's the same for the local people, they get involved with the artists and the artists bring



[後列左より] 塩見有子 (AIT)、小川希 (アートセンター・オンゴーイング)、太田エマ (ディスロケイト)、ロジャー・マクドナルド (AIT)、朝重龍太 (アーカスプロジェクト)
[前列左より] 堀内奈穂子 (AIT)、嘉藤笑子 (アート・アウトノミー・ネットワーク / AAN)、ジーナ・ブエンフェルド (カムデン・アーツ・センター)、庄子渉 (パラダイスエア)
[From Left in the back row] Yuko Shiomi, AIT / Nozomu Ogawa, Art Center Ongoing / Emma Ota, dislocate / Roger McDonald, AIT / Ryota Tomoshige, ARCUS Project
[From Left in the front row] Naoko Horiuchi, AIT / Emiko Kato, AAN / Gina Buenfeld, Camden Arts Centre / Wataru Shoji, PARADISE AIR

庄子：パラダイスエアでは、地域の人々とアーティストが即興的に創作活動を行います。時間的な制約もあり、アーティストは状況に応じてこのような活動を行う必要があります。しかしこうした制約により、地域の人々が積極的に制作活動に関わり、アーティストにとっても地域の人々にとっても未知のものをもたらしてくれます。このような活動は、人々の寛容性や想像力を養うエクササイズとして機能しています。

朝重：アーカスは特に展示スペースは無く、スタジオのみを持っていますが、それを公共に向かって開くようにしています。アーティストたちは、スタジオを使って作品を見せる必要はなく、どんな用途に使用してもいいのです。コーディネーターとしての私たちの仕事は、誰かの関心を別の誰かと分かち合う環境をつくることです。滞在するアーティストは、守谷市について何も知らないため、私たちがアーティストを地域内外の人々と結びつけるようにしています。

ブエンフェルド：カムデンの役割について考えたとき、私は、カムデンは人々が集う場所であると捉えています。そこでは、アーティストが相互に影響し合い、アイデアを共有できます。ロンドンでは、2013 年にオルタナティブなアートスクール「オープン・スクール・イースト」がアーティストとキュレーターによって設立されました。そこでは、アーティストがアーティストを教える仕組みが取られています。ある意味では、このやり方は持続可能では無いかもしれませんが、一つの抵抗の態度として見ることができます。このようなことから、アートには力があり、考える場として機能するとも考えられます。しかしまた、私は、カムデンは人々の経験の場でもあるということも、常に考えていきたいと思っています。

マクドナルド：ここにいる全員が、アーティストやアートに関心を払うことのできる、強度のある瞬間を作り出そうとしている、そう感じています。

something unknown. It functions as an exercise for the mind.

Tomoshige: ARCUS doesn't have any particular exhibition spaces but has a studio, we try to make them open to the public. Artists don't have to use the studio to show art works. You can use it for anything you want. It is our job as coordinator to create space to share someone's interest with another person. The resident artists don't know anything about Moriya so we connect them with the people even outside the area.

Buenfeld: In Camden I think it's a reference to Camden as a place where people gather. There's a sense of artists influencing each other and sharing ideas. Actually doing things and giving rise to things like understanding. In London an initiative was set up called Open School East – an alternative art school set up by artists and curators. There are fellows – artists taught by artists. In a way it may not be sustainable but it was like an act of protest. That sense of art having agency and it being a site for thinking. We are always vigilant that CAC remains a place for experience.

McDonald: I feel that everyone is trying to create moments of intensity where people can pay attention to artists, and art.

ASSOCIATES FROM THE ROUNDTABLE

参加団体のご紹介

アーカスプロジェクト

茨城県を主催に 1994 年に開始され、国際的に活動するアーティストが滞在制作を行うアーティスト・イン・レジデンスプログラムと、地域の方々が主体となって関われる場づくりやワークショップ等のプログラムを展開しています。レジデンスプログラムは、公募によって世界中からアーティストを招聘し、アートを通じて国籍や世代を超えた様々な交流の機会を提供しています。サロンにはアーティストやキュレーター、地域の方々が集い、アートを通じて地域の方々が創造力と主体性を発揮できる環境を創出し、多様性のある魅力ある地域づくりを目指しています。

アートセンター・オンゴーイング

Art Center Ongoing は、いまの時代を担う必見アーティストを紹介するギャラリースペース、新旧アートブックの閲覧も可能な交流の場としてのカフェ&パースペース、そして独自のネットワークにより編集した広範なアーティスト情報を提供するライブラリーブースを併設する芸術複合施設です。シンポジウムやライブ等のイベントも積極的に行い、現在進行形の表現の可能性を探っていきます。いま、アートに何が起きているのか?新しいつながりから表現の未来を開拓していきます。

ディスロケイト

ディスロケイトは、パブリックを考え直すリサーチ、ディバート、アクションのためのプラットフォームを創出しています。パブリックスペースは、複雑な社会の象徴とも言えます。行政任せではない、市民一人一人が作っていくスペースとして、どのように個人がその空間を変えられるか、構築できるかということを検討しています。その中で社会の周辺に押しやられた人々の重要な役割に焦点を当て、その存在をより可視化しようとしています。このようにディスロケイトは様々な社会問題について議論を巻き起こし、親しみ慣れた環境の表層では見えない、様々なレベルで存在する複雑さを指摘します。海外のアーティスト・専門家を呼ぶことで、地域の目に見えないレイヤーを発見し、自然に受け入れてきたことを見直し、新しい視点を取り入れるきっかけをもらします。

パラダイスエア

千葉県・松戸駅前のパチンコ店「楽園」の上層階にあるアーティスト・イン・レジデンス施設。松戸駅周辺の町会や自治会で組織するエリアマネジメント団体、松戸まちづくり会議がパチンコ店「楽園」の協力を得て、元ホテルだった遊休空間を活用して運営しています。かつて宿場町として栄えた千葉県松戸駅前は、江戸と水戸をつなぐ中継点として多くの旅人が行き交いました。地元住民の邸宅には、過去に訪れた文人や画人が、宿代の代わりに残した作品が今も残るといいます。PARADISE AIR はこうした松戸宿の歴史や伝統を踏まえ「一宿一芸」をコンセプトに掲げ、様々なアーティストや芸術文化の新しい中継点となることを目指します。

ARCUS Project

ARCUS Project involves “Residency for Artists, Experiments for Locals” and aims to support promising artists who engage in creative activities around the world, as well as promoting the Ibaraki area through art. The project started in 1994 as a test artist-in-residence program and was an initiative of the Ibaraki Prefectural Government. After a successful six year test period, the project officially began. By collaborating with emerging artists, curators, and prospective art managers, ARCUS Project connects the Ibaraki area with art and encourages residents of Moriya city to participate in various art projects including exhibitions, workshops, lectures, and film screenings. Based in the city of Moriya, ARCUS Project is growing as a hub in which revolutionary art is fostered through international programs.

<http://www.arcus-project.com>

Art Center Ongoing

Art Center Ongoing is a complex art institution with a gallery that introduces the must-see artists that are leading today’ s art trends. Art Center Ongoing also includes a cafe and bar that are places for communication where visitors can read old and new art books, as well as browsing the library booth containing extensive information about the artists in our network. The institution also actively organises events such as symposiums and live events, with the aim of searching for the possibility of ongoing expression and to ask what's happening in art right now? By establishing new connections, Art Center Ongoing opens up new ground for the future of expression.

<http://www.ongoing.jp>

dislocate

dislocate is a platform for research, debate and action upon the public sphere that seeks to invest an invigorated awareness towards the spaces we directly inhabit and attempts to reassess our very sense of agency within these. The platform also proposes through various artistic interventions the creative potential invested in us on an individual and collective scale to construct the spaces and communities around us and challenge our assumed ways of seeing the world. It asserts the importance of questioning and freedom of expression in our daily enactments of civil society, and hopes to open up debate upon the role of so called democratic processes in the politics of the everyday.

<http://dis-locate.net/0/>

PARADISE AIR

PARADISE AIR is an Artist-in-Residence program based on the upper floor of Rakuen pachinko parlour and organised by Matsudo Community Council, a group of local neighborhood associations from around Matsudo Station. Many years ago, Matsudo prospered

アート・アウトノミー・ネットワーク [AAN]

2005 年に設立された AAN は、国内外のオルタナティブ・アート組織やアートプロジェクトの情報収集とアーカイヴを基盤としたネットワーク活動を行なっています。国際的で自律的な芸術活動を支援していくためのプラットフォームを提供し、これまで芸術団体・個人を支援していくための展覧会、ワークショップやシンポジウムなどのプログラムに力を入れています。ディレクターの嘉藤は、2015 年日本橋に開館した NICA: Nihonbashi Institute of Contemporary Arts の企画委員として関与しています。本施設が、世界水準の実験的なラボトリーとして、東京中心地からクリエイティビティーを発信していければと思います。

カムデン・アーツ・センター [CAC]

CAC は、イギリスのロンドンに拠点を置く、国際的な展覧会および教育の場を創出している歴史あるアートセンターです。CAC では、アーティストが中核となるプログラムを特長とし、市民が同時代のアーティストの考えやプロセスに触れたり、刺激を得られる機会を作っています。また、ギャラリースペースに加え、近隣の学校が無料で使用できるスタジオスペースでは、経験や能力を問わず、あらゆる世代の人々が、陶芸、絵画、ドローイング、ライティングなどの技術を学べるプログラムを提供しています。

NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ [エイト／ AIT]

AIT は、2003 年より、海外のアーティストやキュレーターを東京に招へいするアーティスト・イン・レジデンスプログラム（以下、AIR）を実施してきました。国内外の美術機関との連携を通して、これまでに 70 名以上のアーティストやキュレーターが東京に滞在し、人や情報、建築、モノが密集する都市ならではの特長を活かし、ネットワーク構築やリサーチを行っています。また、AIT の行う教育プログラム MAD (Making Art Different) との関わりを通してレクチャーや実験的なワークショップを行うことで、さまざまな視点や考えを持つ MAD 受講生、美術関係者と意見交換ができるのも、AIT の AIR の特長の一つです。

発行日	2015 年 3 月 31 日
発行	NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/ エイト]
編集	ベン・デイビス、ロジャー・マクドナルド、堀内奈穂子、依田理花
翻訳	Hanare × Social Kitchen Translation
写真	越間有紀子
デザイン	岡田味佳 (Fruitmachine)

Published	31st March 2015 by Arts Initiative Tokyo [AIT]
Editors	Ben Davis, Roger McDonald, Naoko Horiuchi, Rika Yoda
Translation	Hanare × Social Kitchen Translation
Photography	Yukiko Koshima
Design	Mika Okada, Fruitmachine

as a place where travellers could rest between the cities of Edo and Mito. At that time, artists often paid for their lodging with a piece of art and a number of the city's current residents still collect the works of writers and painters from that era. Inspired by a rich cultural and artistic history, PARADISE AIR continues the tradition of “One Night, One Work of Art” by allowing artists to stay at the residence in exchange for an artwork.
<http://paradiseair.info>

Art Autonomy Network [AAN]

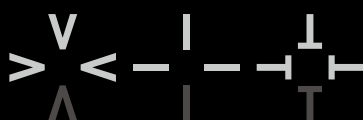
AAN was founded in Japan in 2005 to examine autonomous art organizations and individuals through the presentation of small but significant art activities across a range of fields. Since its foundation, AAN has built a network based around art activities that are not often represented in major institutions such as museums and commercial galleries. In fostering an art archive featuring documentation and information from various art organizations, AAN hopes to enhance cultural exchange by initiating and facilitating networks among organizations in both Japan and overseas. Emiko Kato, a director of AAN has been involved a core member of NICA: Nihonbashi Institute of Contemporary Arts which has opened in a centre of Tokyo for creating new contemporary art scenes in 2015, while understanding the global contexts from Japan.
<http://a-a-n.org>

Camden Arts Centre [CAC]

CAC is a place for world-class contemporary art exhibitions and education. With artists at the core of the programme, CAC strives to involve members of the public in the ideas and processes of today's artists, and the artists who inspire them. In addition to gallery spaces, the building comprises of studios which schools can use free of charge and in which people of all ages and abilities can learn skills in ceramics, painting, drawing and writing as part of the courses programme.
<http://www.camdenartscentre.org>

Arts Initiative Tokyo [AIT]

AIT has been running an artist-in-residence program since 2003. In partnership with art organisations in Japan and abroad, over 70 international artists and curators have come to Tokyo to conduct research, build networks and experience the metropolis and its unique clustering of people, information, architecture and objects. The program is unique in that it interfaces with MAD (Making Art Different), the educational program run by AIT. The involvement of visiting artists and curators in both lectures and experimental workshops provides an additional platform for MAD students to exchange a variety of ideas and opinions with peers working in the art industry.
<http://www.a-i-t.net>



平成26年度文化庁文化芸術の海外発信拠点形成事業
Supported by the Agency for Cultural Affairs,
Government of Japan, in Fiscal Year 2014